

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第30集

館林市内遺跡発掘調査報告書

大道北遺跡 (C地点)

渕ノ上1遺跡

加法師遺跡

南近藤遺跡 (B地点)

清水橋遺跡 (B地点)

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

大道北遺跡（C地点）

淵ノ上1遺跡

加法師遺跡

南近藤遺跡（B地点）

清水橋遺跡（B地点）

館林市教育委員会

例 言

1. 本書は平成8年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教 育 長	高瀬利一				
教 育 次 長	関口久男				
主 管 課	文化振興課				
文化振興課長	田沼俊彦				
文化財係長	石井正和				
主 査	新井直次				
学 芸 員	岡屋英治	岡屋紀子（担当）	黒澤文隆		
	阿部弥生	原 幸恵			
調査補助員	寺内景子				
作 業 員	石井悦雄	石川栄吉	川島範子	小林浩子	
	坂田岩吉	高瀬 広	長棟晋吾	野口 信	

3. 調査に伴う経費は、国および県より補助を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物、調査記録および資料は、館林市教育委員会で保管している。
5. 本書の取りまとめは、岡屋紀子を中心となり行った。
6. 調査ならびに本書の刊行にあたり、関係諸氏、諸機関のご指導を賜りました。厚くお礼申しあげます。

《 目 次 》

例 言	
第 I 章 館 林 市 の 環 境	1
第 II 章 各 遺 跡 の 調 査	
第1節 大 道 北 遺 跡 (C地点)	4
第2節 淵ノ上1遺跡	16
第3節 加 法 師 遺 跡	18
第4節 南 近 藤 遺 跡 (B地点)	23
第5節 清 水 橋 遺 跡 (B地点)	26
抄 録	28

《 図 版 目 次 》

第 1 図	館林市の位置と現況図	1
第 2 図	館林市の地形と調査された遺跡	3
第 3 図	大道北遺跡周辺図	4
第 4 図	大道北遺跡 (C地点) 調査区全体図	6
第 5 図	大道北遺跡 (C地点) 1号住居址	8
第 6 図	大道北遺跡 (C地点) 1号土塚 (円形大型遺構)	10
第 7 図	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物①	12
第 8 図	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物②	13
第 9 図	淵ノ上1遺跡周辺図	16
第 10 図	淵ノ上1遺跡調査区全体図	17
第 11 図	淵ノ上1遺跡出土遺物	17
第 12 図	加法師遺跡周辺図	18
第 13 図	加法師遺跡調査区全体図	20
第 14 図	加法師遺跡出土遺物①	21
第 15 図	加法師遺跡出土遺物②	22
第 16 図	南近藤遺跡周辺図	23
第 17 図	南近藤遺跡 (B地点) 調査区全体図	25
第 18 図	清水橋遺跡周辺図	26
第 19 図	清水橋遺跡 (B地点) 調査区全体図	26

《 写 真 目 次 》

写 真 1	大道北遺跡 (C地点) 調査前	5
写 真 2	大道北遺跡 (C地点) トレンチ内調査風景	5
写 真 3	大道北遺跡 (C地点) 重機による掘削 (住居址部分)	5
写 真 4	大道北遺跡 (C地点) 1号土拡調査風景	6
写 真 5	大道北遺跡 (C地点) 1号住居址	7
写 真 6	大道北遺跡 (C地点) 1号住居址遺物出土状態 (全体)	9
写 真 7	大道北遺跡 (C地点) 1号住居址遺物出土状態 (カマド付近)	9
写 真 8	大道北遺跡 (C地点) 1号住居址遺物出土状態 (床面上)	9
写 真 9	大道北遺跡 (C地点) 1号土壇 (円形大型遺構)	10
写 真 10	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物①	14
写 真 11	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物②	14
写 真 12	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物③	14
写 真 13	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物④	14
写 真 14	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑤	14
写 真 15	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑥	15
写 真 16	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑦	15
写 真 17	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑧	15
写 真 18	大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑨	15
写 真 19	渕ノ上1遺跡調査風景	17
写 真 20	渕ノ上1遺跡出土遺物	17
写 真 21	加法師遺跡1トレンチ遺物出土状態	19
写 真 22	加法師遺跡2トレンチ遺物出土状態	19
写 真 23	加法師遺跡出土遺物	22
写 真 24	南近藤遺跡 (B地点) 1トレンチ	24
写 真 25	南近藤遺跡 (B地点) 5トレンチ	24
写 真 26	清水橋遺跡 (B地点) 調査風景	27

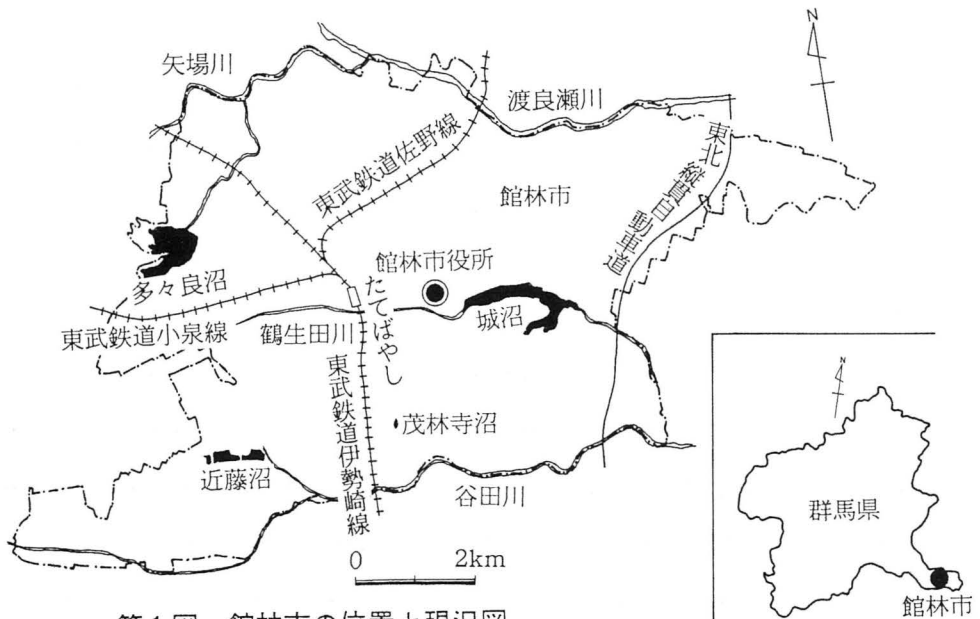
第I章 館 林 市 の 環 境

1. 地 理 的 環 境

館林市は、群馬県の南東部、関東平野の北辺に位置し、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、南は邑楽郡明和村を越え利根川を境に埼玉県に接している。市域は、東西約15km、南北約8kmと東西に長く、総面積は約61k㎡である。また、県都前橋市までは約50km、東北自動車道館林インターから都心まで60km余りで首都圏との結び付きも強い。

地形的には一見平坦に見える本市も、ほぼ中央部には標高20m前後の「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地が東西に延び、この洪積台地を取り囲むように標高15m前後の沖積地が広がっている。台地上は関東ローム層に覆われ、さらに大泉町古海から館林市高根町にかけて幅200m程の内陸古砂丘（埋没河畔砂丘）が連なる。台地からの比高はプラス5m前後で、この古砂丘上に館林市内で最も高い標高32m（高根町）がある。また、台地の周囲に広がる沖積地（低地）は利根・渡良瀬川に連なる大小河川の氾濫原で、自然堤防、旧河道、低湿地、池沼、河川などから成り立っている。県下でも地盤の低い地域に属し、全体的に北西から南東へ向けて緩やかに傾斜する傾向が見られる。これは、関東造盆地運動の影響によるものと考えられるが、台地面と低地面との比高差も北部・西部は大きく、南部・東部では小さくなっている。

台地の縁辺部には、低地から延びる多くの開析谷が樹枝状に入り込み、谷の部分に城沼、茂林寺沼、寺沼をはじめとする大小の沼や湿地帯が形成され、本市の特色ある景観となっている。



第1図 館林市の位置と現況図

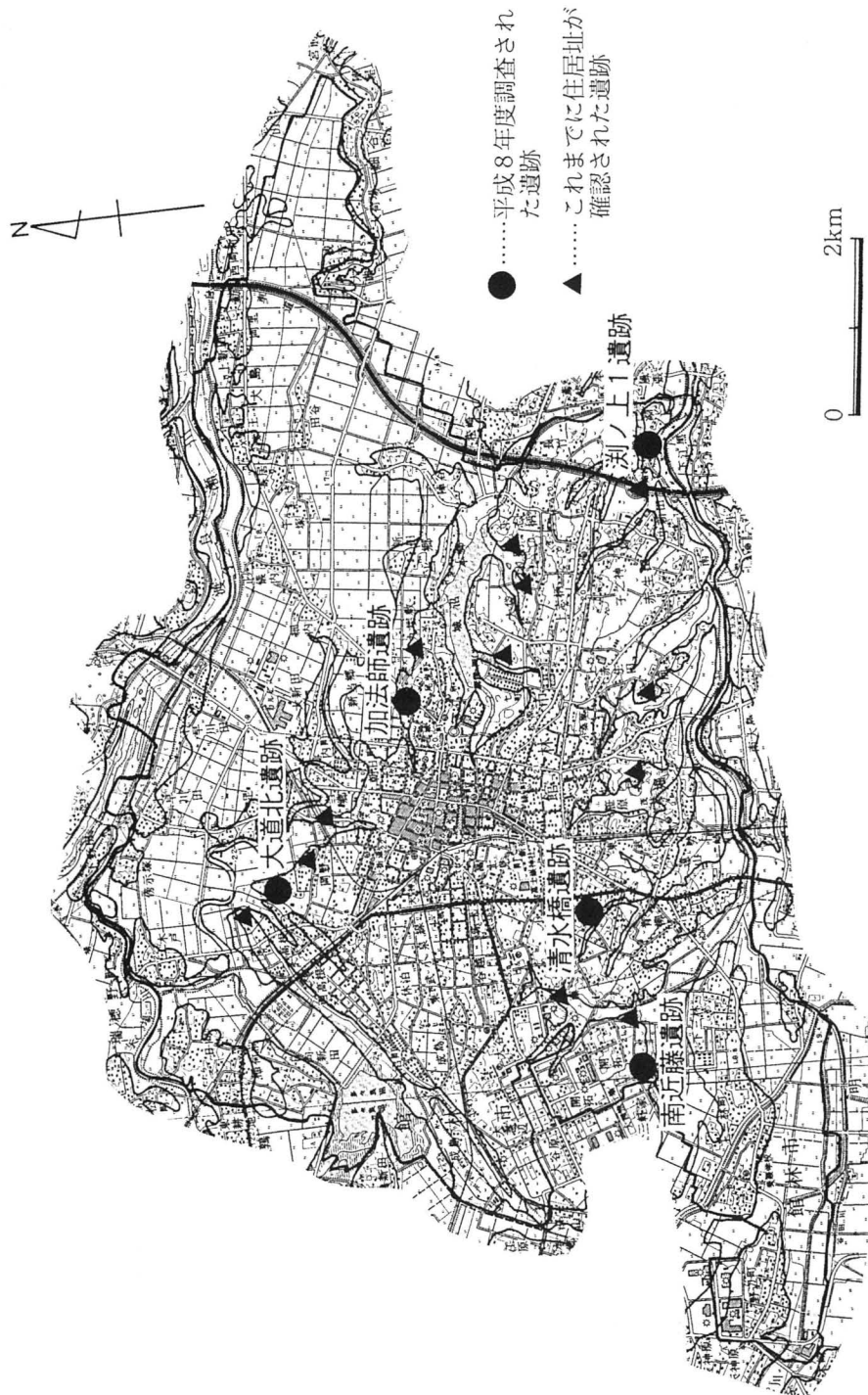
2. 館林市内の遺跡

館林市内における遺跡数は、昭和58年から63年にかけて実施した市内遺跡詳細分布調査（『館林市の遺跡』）によると、推定地を含め144か所あり、その多くは低い台地上に分布している。これは、現地調査により遺跡として可能性を推定したものであるが、その内訳は、遺物散布地として、旧石器時代3、縄文時代13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代0、古墳時代から平安時代96（うち縄文時代の遺物散布が見られるもの23）があり、その他では、古墳17基（推定を含み延べ25基）、中世生産址1、中世城館址12（伝承地を含む）、近世城館址2となっている。傾向として縄文時代の後・晩期から弥生時代、古墳時代初頭の遺跡が少ないことがわかる。

今年度の調査を含め、これまでの発掘調査により住居址が確認された遺跡は15か所である。その内訳を地域別に見ていくと、まず市内中央部から東部へ延びる城沼周辺では、南岸に位置する大袋Ⅱ遺跡（縄文）、大袋4遺跡（古墳）、大袋城遺跡（古墳）があげられる。また、かつて邑楽・館林台地のすぐ北を流れた旧矢場川周辺では、高根・外和田遺跡（古墳）、岡野・屋敷前・岡遺跡（古墳）、八方遺跡（古墳）、尾曳町1遺跡（古墳）の他、今年度調査した大道北遺跡（古墳）、加法師遺跡（縄文）があげられる。さらに、邑楽・館林台地の南側を見てみると、南西部の近藤沼北岸に広がる開析谷周辺の台地には、北近藤第一地点遺跡（古墳・平安）、伝右エ門遺跡（古墳）の他、今年度調査した南近藤遺跡（古墳・奈良）がある。特に北近藤第一地点遺跡では、昭和62・63年度の調査の結果、これまでに調査した市内の遺跡の中で最も数の多い26軒の住居址が確認できた。近藤沼の東の低地には茂林寺沼や蛇沼があるが、この周辺の台地には下堀工道満遺跡（平安）、間堀遺跡（縄文）がある。さらに市域の東南端には道満遺跡（弥生～古墳、平安 ※破壊）がある。この他、台地の南側の地域では、住居址は確認されていないが、縄文時代後・晩期の遺物が大量に出土した遺跡として、大原道東遺跡や上ノ前遺跡があげられる。

古墳については、昭和10年刊行の『上毛古墳総覧』に67基の古墳が記されていることから、現在は古墳の数がその半数以下になっていることがわかる。これまでに調査され、埋葬施設が確認できた古墳は、市内北西部の高根古墳群の一つの天神二子古墳と、市内南東部の淵ノ上古墳の2基である。また、開発によって墳丘は失われているが、平成6年度の発掘調査により、周溝の一部が確認された市内北西部の日向古墳群に近い下遺跡の例などから、今後も古墳が新たに発見される可能性もある。

さらに、市内には中世から近世にかけての城館址も多く存在するが、特に近世館林城を中心とする城下町の区域は、現在の市街地のはぼ中心であることから、城の遺構である土塁や堀はほとんど失われてきている。



第2図 館林市の地形と調査された遺跡

第Ⅱ章 各遺跡の調査

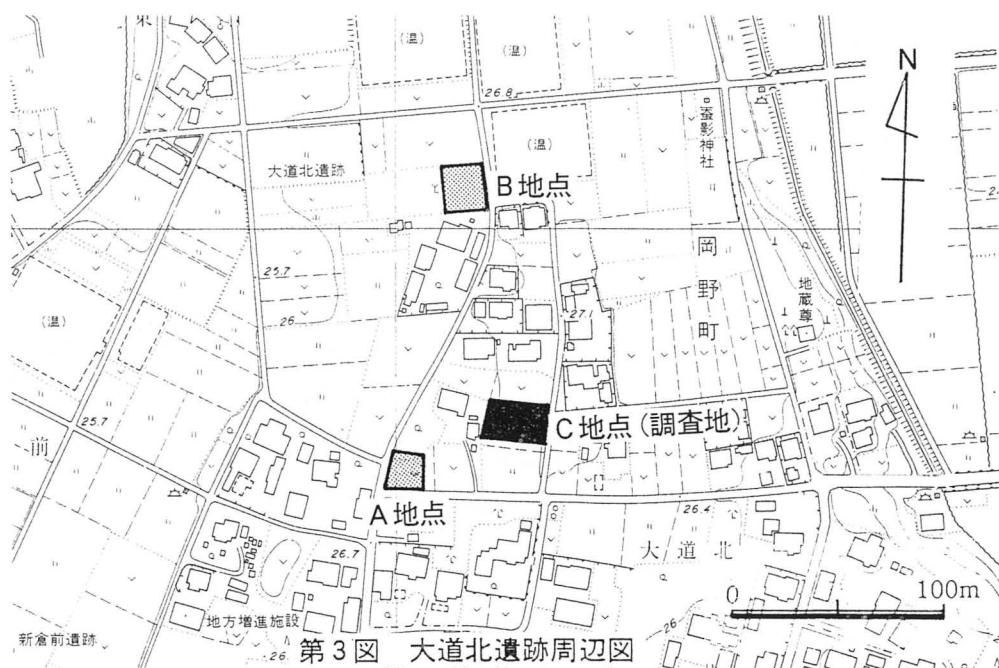
第1節 だいでうきたいせき 大道北遺跡 (C地点)

1. 立地と環境

大道北遺跡は、東武鉄道佐野線渡瀬駅の西方約1.2km、県道足利・館林線の東側に位置する。『館林市の遺跡』作成に伴う市内遺跡詳細分布調査において、遺物の散布状況と付近の地形から、古墳時代から平安時代の遺跡とされた。名称は小字名を付したものである。

地形的には、邑楽・館林台地の北縁にあたり、北と東は渡良瀬川の氾濫原である沖積低地に面し、西には邑楽・館林台地を開析し高根幹線排水路を谷底とする谷が南北に走っている。遺跡は、北へ延びる舌状台地の付け根部分に広がり、標高は約26mである。

散布する遺物は、古墳時代から平安時代のもので、西側の低地に沿うように広がっている。平成6年度に2地点 (A・B地点) で調査を行っているが、特筆される遺構は確認されていない。周辺の遺跡には、南東に隣接して岡野・屋敷前・岡遺跡 (縄文、古墳～平安)、南西に隣接して新倉前遺跡 (古墳～平安)、さらに谷を隔てて北西には高根・外和田遺跡 (縄文、古墳～平安)、高根古墳群などが分布している。このうち、発掘調査により住居址等が確認されたのは、岡野・屋敷前・岡遺跡と高根・外和田遺跡である。



第3図 大道北遺跡周辺図

2. 調査に至る経緯

大道北遺跡の発掘調査は、館林市岡野町字大道北495-1の地権者小林一美氏の個人専用住宅建設に伴う事前調査として実施された。

館林市教育委員会では、この土地の開発許可申請に先立ち、代理人から埋蔵文化財の取り扱いの照会を受け協議を開始した。

大道北遺跡における過去2回の発掘調査では、特筆される遺構等は確認されなかったが、今回の開発予定地は、遺跡範囲のほぼ中心にあたり、散布する遺物の密度も濃いことなどから、耕作物の収穫後に調査を実施することとした。

3. 調査の方法と経過

大道北遺跡では、平成6年度に2地点(A・B)の調査が実施されているため、今回の調査地はC地点とした。調査区域は南北約17m、東西約30mの長方形であるため、東西方向に3本のトレンチを設定し、北から1・2・3トレンチとし、土木重機により耕作土を取り除いた。

この結果、地表から80cm前後の深さでローム層があらわれ、精査したところ、1トレンチから幅約4mの掘り込みが1か所、2トレンチから東西方向に走る溝状の掘



写真1 大道北遺跡 (C地点) 調査前



写真2 大道北遺跡 (C地点) トレンチ内調査風景



写真3 大道北遺跡 (C地点) 重機による掘削 (住居址部分)

り込みが1本、3トレンチから幅約7mの掘り込みが1か所確認された。

特に1トレンチと3トレンチの掘り込みからは、古墳時代後期の一括土器が出土したことから、住居址等の遺構と判断し、トレンチ間の表土を土木重機で取り除き、引き続き本調査を実施した。

これにより、3トレンチ拡張部分から竪穴式住居址が1軒と、1ト

レンチ拡張部分から土塚（円形大型遺構）が1基検出された。これらの遺構は、床面より出土した一括土器から、古墳時代後期（鬼高期）に位置付けられ、住居址と土塚は同時期のものと推定できる。なお、住居址ならびに土塚については、本遺跡における最初の検出となるためそれぞれ「1号住居址」「1号土塚」とした。

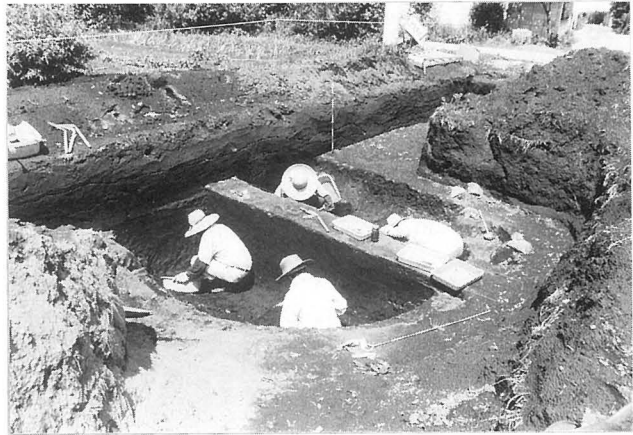
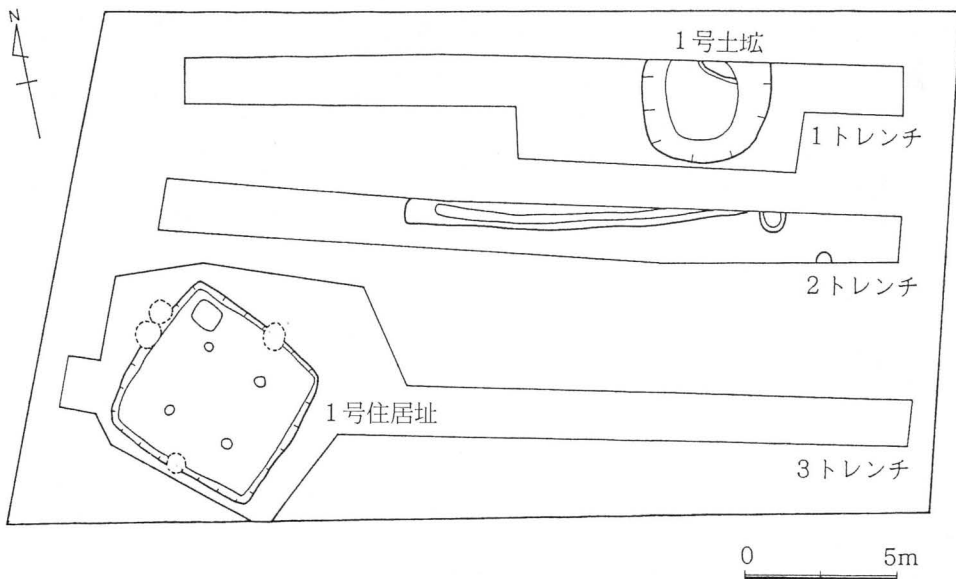


写真4 大道北遺跡（C地点）1号土塚調査風景



第4図 大道北遺跡（C地点）調査区全体図

4. 発見された遺構と遺物

【1号住居址】

本住居址は、調査区の南西部から検出され、約5.8m×約5.6mのほぼ正方形に近い平面形となり、方位は北西42°である。ローム面（遺構確認面）から床面までの深さは40cm前後で、さらに壁に沿って幅35cm、深さ7cmの壁溝が全周していた。

柱穴は4本で、いずれも壁から約1.2mのところの外形と相似形をなすように配されていた。

カマドは、後世の掘り込みによってそのほとんどが破壊されていたが、北西壁のほぼ中央部内側に、焚き口部と思われる焼土の痕跡が認められ、両袖には長胴甕が据えられてあった。焚き口部の幅は約40cmであった。

貯蔵穴はカマドに向かって右側、住居址の北隅で確認された。約60cm×約90cmの長方形で、深さ約20cmであった。覆土は炭化物を含んだ黒褐色土で、遺物は少量の土器片が出土した。

床面は全体的に固くしまり、南東壁に面して約2.6m×約1.2mの範囲で、高さ約8cmの段状の構造が確認された。カマドと相対する位置にあることから、出入口部分と考えられる。

遺物は、カマドの両袖に使用されていた長胴甕が2個体、住居の中央部から5個体の大小の甕や甑の一部の他、復元不可能な土器片約350片が出土した。時代は、古墳時代後期（鬼高期）のものである。

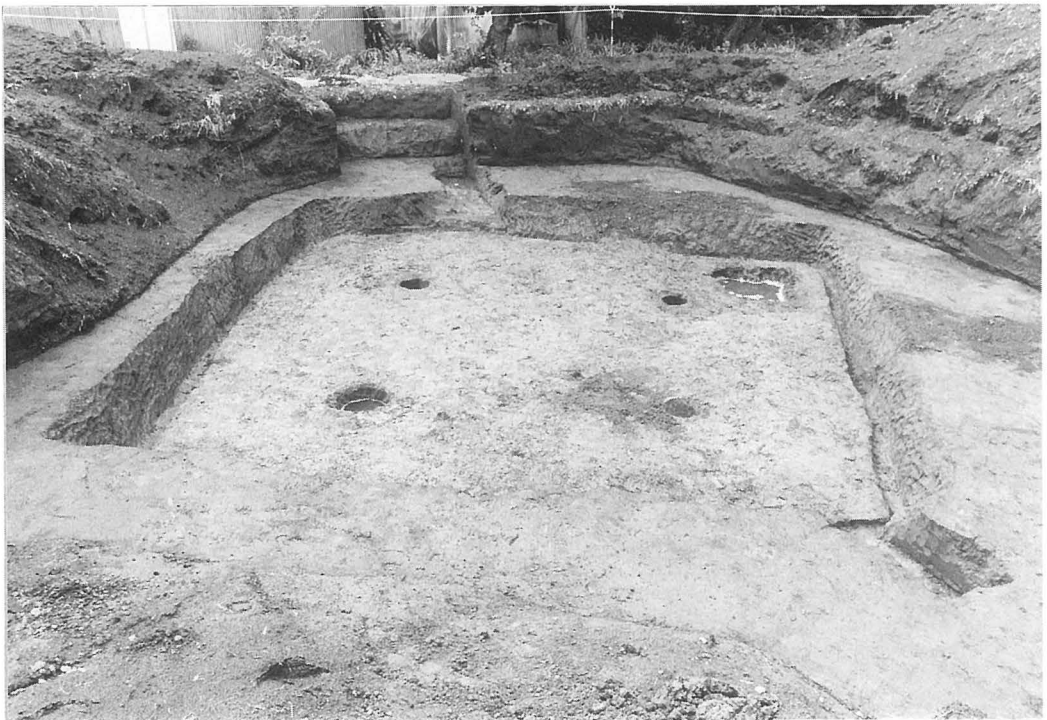
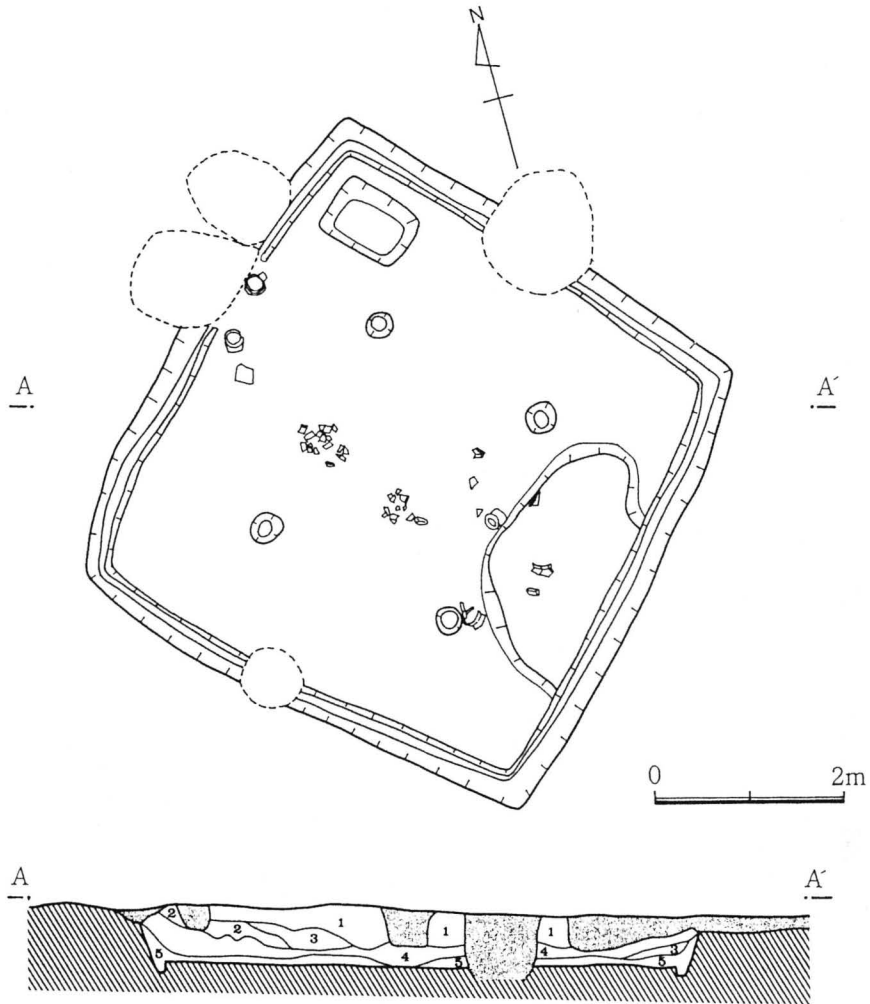


写真5 大道北遺跡（C地点）1号住居址



1号住土層注記

第1層	黒色土	粘性なし	縮りなし	砂粒子微量に含む
第2層	黒褐色土	粘性なし	縮り有	ローム粒子微量に含む
第3層	黒褐色土	粘性なし	縮りなし	焼土粒子少量含む
第4層	暗褐色土	粘性なし	縮りなし	ローム粒子、焼土粒子、カーボン粒子少量含む
第5層	明褐色土	粘性有	縮り有	ローム粒子、ロームブロック多量に含む

第5図 大道北遺跡(C地点)1号住居址



写真6 大道北遺跡（C地点）1号住居址遺物出土状態（全体）



写真7 大道北遺跡（C地点）1号住居址
遺物出土状態（カマド付近）



写真8 大道北遺跡（C地点）1号住居址
遺物出土状態（床面上）

【1号土壇（円形大型遺構）】

本土壇は、調査区の北東部から検出され、直径約4.2mのほぼ円形の平面形であった。ローム面（遺構確認面）から底面までの深さは約1.1mで、底面の直径は約2.3mのほぼ円形をし、底面に向かって内側に緩やかに傾斜していた。また、底面に段状の構造が認められたことから、本遺構の性格は井戸址とも考えられ、段状構造は取水のための足場と推定できる。

遺物は、古墳時代後期（鬼高期）の坏1個体、高坏の脚部、甕2個体の他、復元不可能な土器片約120片が出土した。

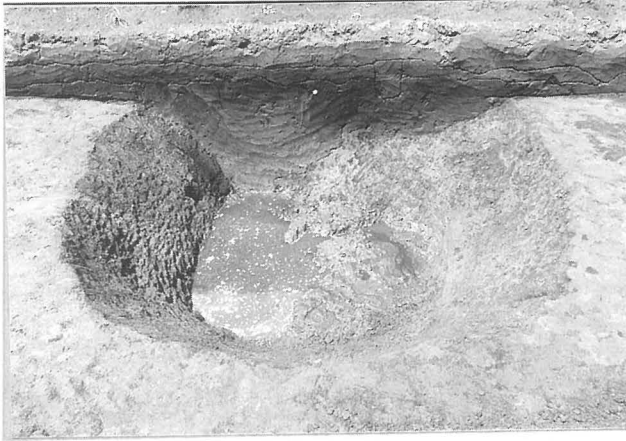
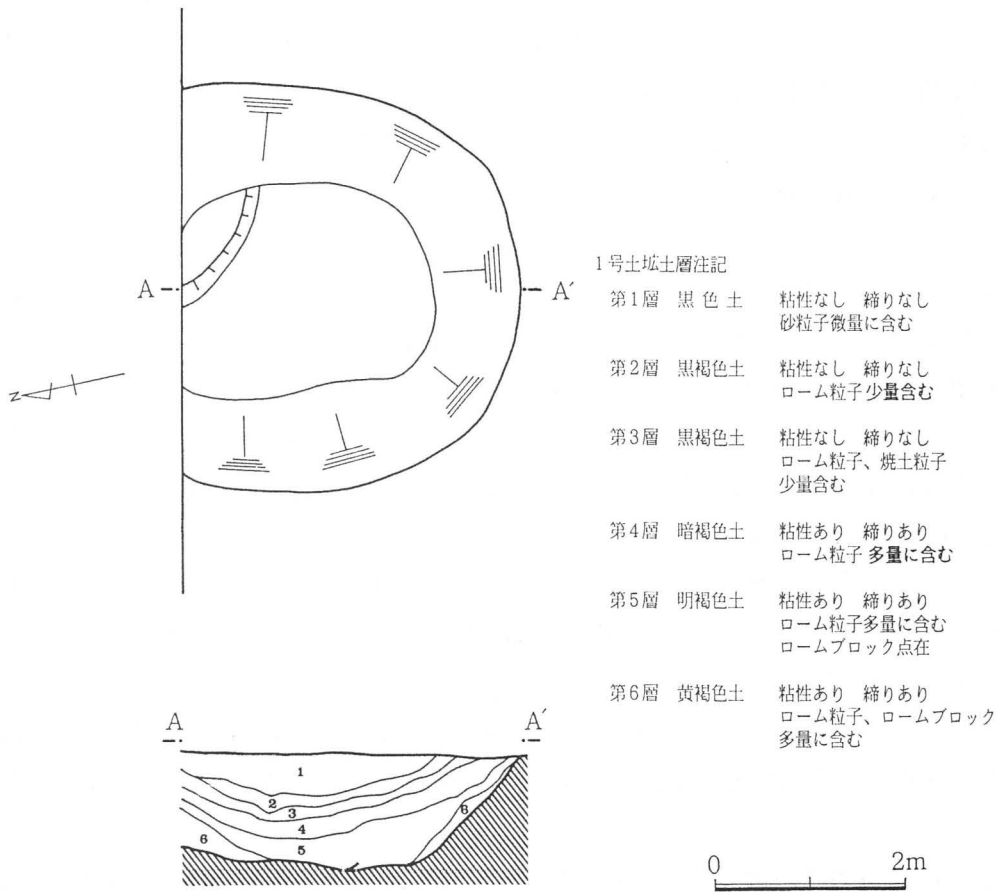


写真9 大道北遺跡 (C地点) 1号土塚 (円形大型遺構)



第6図 大道北遺跡 (C地点) 1号土塚 (円形大型遺構)

【出土遺物（土器）】

(1)は、1号住居址のカマドの向かって左袖部より出土した長胴甕で、ほぼ完形。器高37cm、口径19.5cm、胴部最大径19.5cmである。色調は淡褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

(2)は、1号住居址のカマドの向かって右袖部より伏せた状態で出土した長胴甕で、胴部から下部が失われている。器高（残存部）20cm、口径20cm、胴部最大径19.5cmである。色調は明灰褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

(3)は、1号住居址のほぼ中央部の床面上から出土した長胴甕で、底部が失われている。器高（残存部）35cm、口径19.5cm、胴部最大径18.5cmである。色調は淡褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

(4)は、1号住居址の南東部の床面上から出土した長胴甕で、胴部から下部が失われている。器高（残存部）14cm、口径21cm、胴部最大径19cmである。色調は明灰褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

(5)は、1号住居址の南東部の床面上から出土した甕で、底部が失われている。器高（残存部）25cm、口径21.5cm、胴部最大径30.5cmである。色調は淡赤褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

(6)は、1号住居址の南東部の床面上から出土した小型甕で、底部が失われている。器高（残存部）16cm、口径14.5cm、胴部最大径20cmである。色調は黒褐色（裏面淡灰褐色）で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

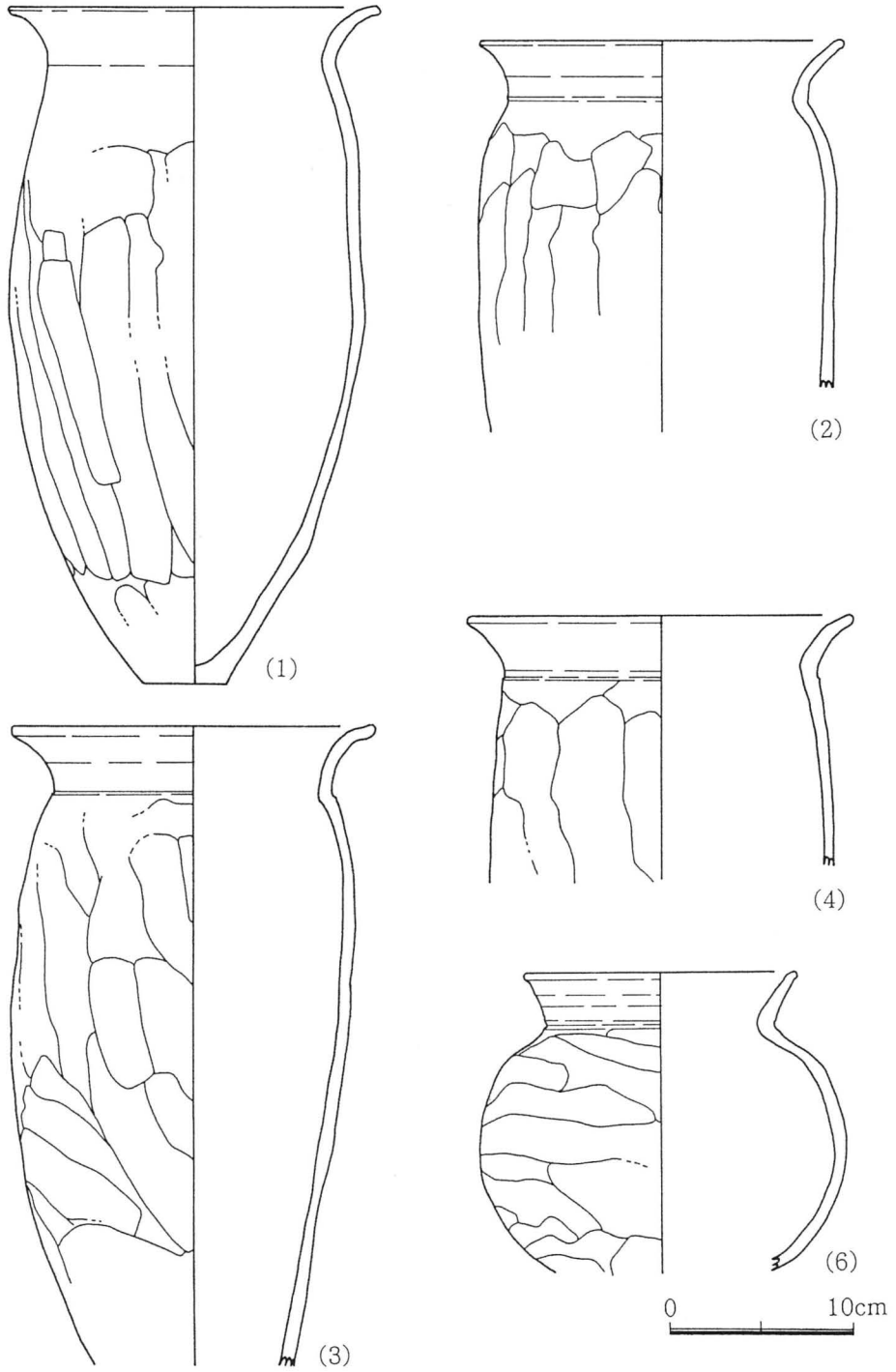
(7)は、1号住居址の覆土中から出土した甕の一部で、底部のみである。底部径6.5cmで、底部中央に直径2.5cmの孔がある。色調は黒褐色（裏面淡灰褐色）で、外面調整は胴部がヘラ削り、底部に木葉痕があり、内面調整は指ナデ。

(8)は、1号土塚の覆土中から出土した甕で、底部が失われている。器高（残存部）20cm、口径21.5cm、胴部最大径32.5cmである。色調は明褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

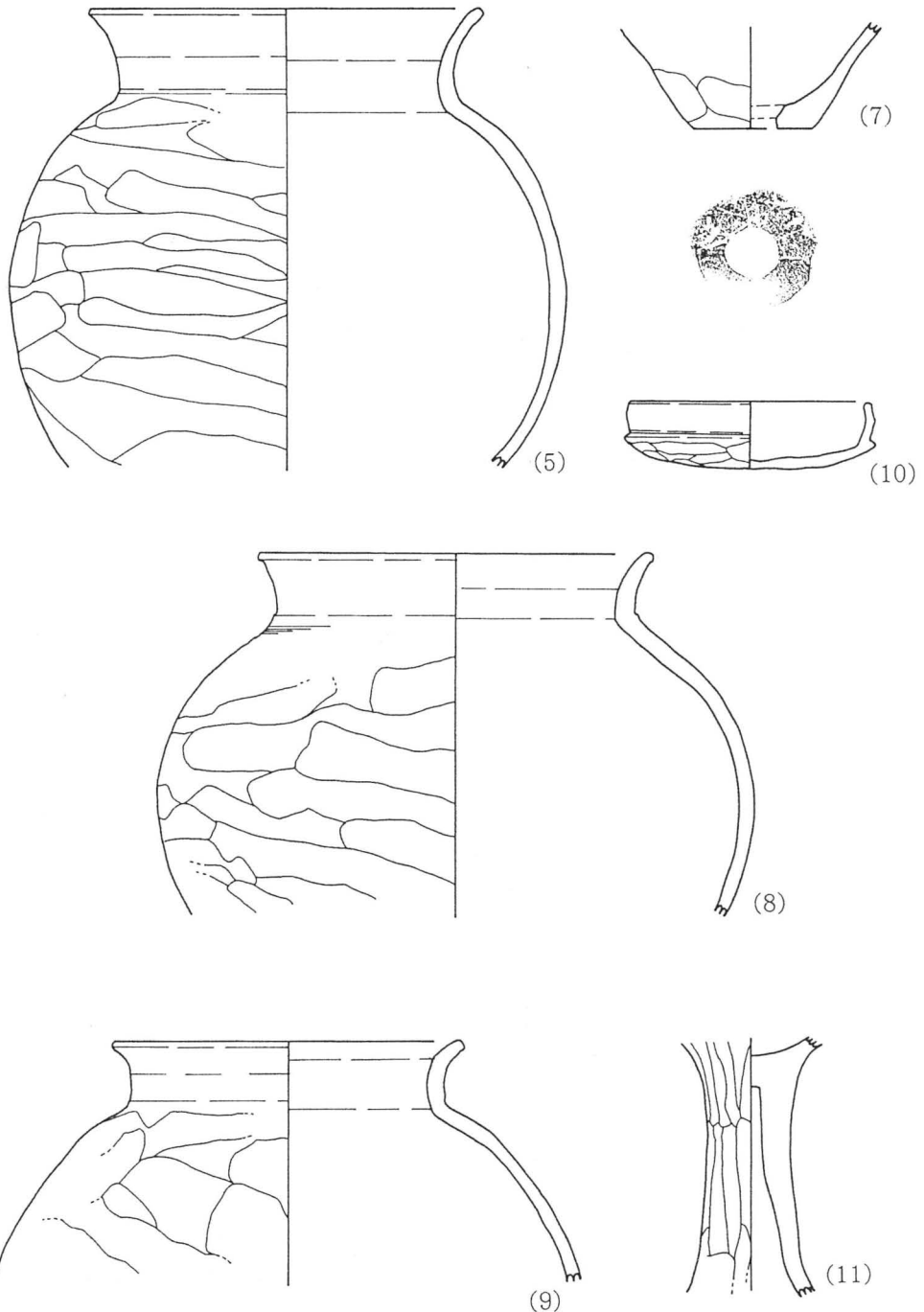
(9)は、1号土塚の覆土中から出土した甕で、胴部から下部が失われている。器高（残存部）13cm、口径19.5cmである。色調は明赤褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

(10)は、1号土塚の覆土中から出土した坏で、ほぼ完形。器高3.8cm、口径13.5cmである。色調は明褐色で、外面調整は口縁部が指ナデ、胴部がヘラ削り、内面調整は指ナデ。

(11)は、1号土塚の覆土中から出土した高坏の一部で、脚部のみである。器高（残存部）15cm、である。色調は淡褐色で、外面調整はヘラ削り。



第7图 大道北遺跡(C地点)出土遺物①



第8図 大道北遺跡(C地点)出土遺物②



写真10 大道北遺跡（C地点）出土遺物①
(No. 1)



写真12 大道北遺跡（C地点）出土遺物③
(No. 3)



写真11 大道北遺跡（C地点）出土遺物②
(No. 2)



写真13 大道北遺跡（C地点）出土遺物④
(No. 4)



写真14 大道北遺跡（C地点）出土遺物⑤
(No. 6)



写真15 大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑥ (No. 5)



写真16 大道北遺跡 (C地点)
出土遺物⑦ (No. 7)



写真17 大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑧ (No. 8. 9)



写真18 大道北遺跡 (C地点) 出土遺物⑨ (No. 10. 11)

第2節 ふちのえいち 淵ノ上1遺跡

1. 立地と環境

淵ノ上1遺跡は、市内南東部、東北縦貫自動車道館林ICの南東約400mに位置する。『館林市の遺跡』作成に伴う市内遺跡詳細分布調査において、遺物の散布状況と付近の地形から、古墳時代から平安時代の遺跡と推定された。名称は小字名から淵ノ上遺跡とし、同じ小字に複数の遺跡があるため数字を付して命名した。

地形的には、邑楽・館林台地の南東縁にあたり、東流する谷田川、北は沖積低地から延びる浅い谷にはさまれた舌状台地の中央部に立地している。遺跡地付近の標高は約20mで、低地との標高差は約1mである。

散布する遺物は、古墳時代から平安時代のものである。周辺の遺跡には、同じ舌状台地上の先端部に淵ノ上古墳があり、北東に隣接する舌状台地上には、淵ノ上2遺跡（平安）、下新田遺跡（土師器）がある。また、北西400mの位置には道満遺跡（弥生～古墳、平安 ※破壊）などが分布している。このうち、道満遺跡は、昭和45年に東北縦貫自動車道館林IC建設に伴い群馬県教育委員会によって発掘調査が行われており、古墳時代初期や平安時代の住居址、方形周溝墓などが確認されている。また、淵ノ上古墳は、昭和63年度に調査を実施し、横穴式石室が検出された他、直刀や多くの埴輪類が出土した。

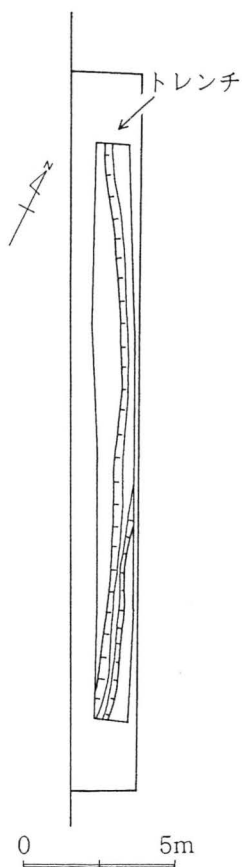


第9図 淵ノ上1遺跡周辺図

2. 調査の概要

湊ノ上1遺跡の発掘調査は、館林市建設部土木課が実施する市道5385号線の拡張整備工事に伴う事前調査として実施された。館林市教育委員会は、『館林市の遺跡』に登載された遺跡範囲のうち、工事にかかる羽附旭町字湊ノ上108-1に遺物散布が見られることや、これまでの調査例がないことから、調査が必要と判断し、協議を重ねた結果、耕作物の収穫後に事前調査を実施した。

調査地は道路拡張部分であるため、道路に沿ってトレンチを1本設定し、土木重機により耕作土を取り除いたところ、地表から約70cmの深さでローム面があらわれ、市道に並行して走る溝状の掘り込みが一本確認された。覆土を取り除いた結果、幅約70cm、ローム面（確認面）からの深さ約40cm、断面がU字形の、溝状遺構となった。出土遺物は、近世以降の陶磁器片や土師質土器片など約50片の他、縄文時代の石斧も出土した。



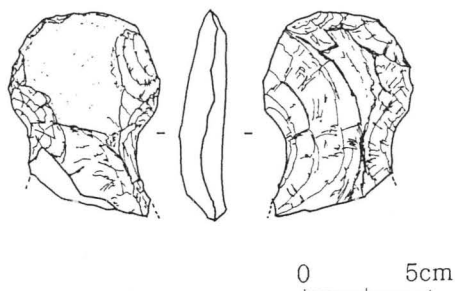
第10図
湊ノ上1遺跡調査区全体図



写真19 湊ノ上1遺跡調査風景



写真20 湊ノ上1遺跡出土遺物



第11図 湊ノ上1遺跡出土遺物

第3節 加 法 師 遺 跡

1. 立地と環境

加法師遺跡は、市内のほぼ中心にある館林市役所の北方約400mに位置する。所在地は、加法師町地内にあり、名称は町名を付して命名した。

地形的には、邑楽・館林台地の北東縁にあたり、北は渡良瀬川に連なる沖積低地が広がる。遺跡付近の標高は約19mで、低地との標高差は約1mである。また、本遺跡を含む市街地一帯は、中世末から近世にかけて、館林城として整備された地域で、加法師遺跡付近は城の北東部に位置する。本遺跡の北側も土塁と堀が巡らされ（平成7年度開発）、遺跡一帯も郭の内部であることがわかる。江戸時代の絵図面等には、この一帯を「中間町」と記しているものもあるが、通称として「加法師郭」とも呼ばれている。

散布する遺物は、縄文時代のものである。また、平成7年度に調査を実施した、隣接する館林城跡土塁の土層からも、多くの縄文土器片が出土した。

周辺の遺跡には、同じ台地上に館林城跡の他、城町遺跡（奈良～平安）、尾曳町1遺跡（古墳）などがある。また、北に広がる沖積地の微高地上には、広内町2遺跡（平安）、若宮遺跡（平安）、外加法師遺跡（縄文 ※破壊）などが分布している。このうち、発掘調査により住居址が確認されたのは尾曳町1遺跡である。



第12図 加法師遺跡周辺図

2. 調査の概要

加法師遺跡の発掘調査は、宗教法人教王院の加法師町2174-1の土地における墓地開発に伴う事前調査として実施された。館林市教育委員会は、教王院から市農業委員会に提出された寺院北側の農地の転用の届出に基づき、協議を開始した。同遺跡における調査の例がないことや、散布する遺物の密度が濃いことから、発掘調査が必要と判断し、協議を重ねた結果、事前調査を実施することとした。

調査地は南北に細長い形であるため、調査は南北方向にトレンチを3本設定し、東から1・2・3トレンチとし、土木重機により耕作土を取り除いた。この結果、トレンチ南部分では地表から約30cm、トレンチ北部分では地表から約

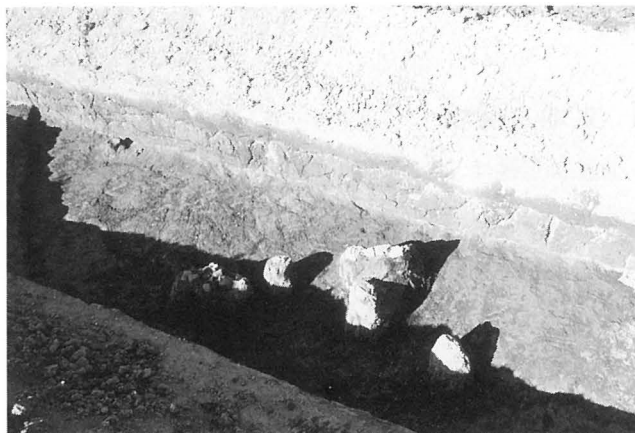


写真21 加法師遺跡1トレンチ遺物出土状態



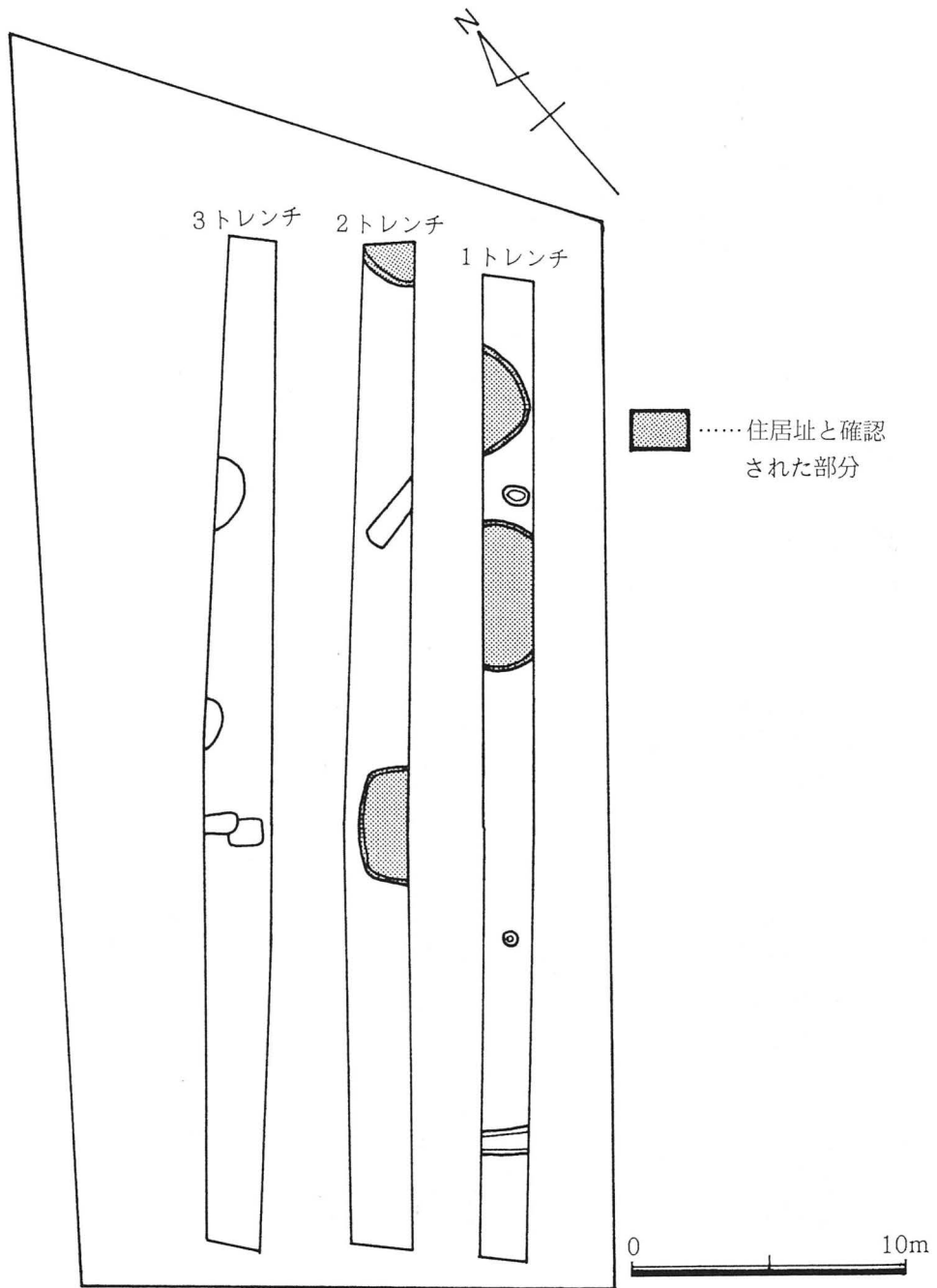
写真22 加法師遺跡2トレンチ遺物出土状態

60cmの深さでローム面があらわれ、精査したところ、1トレンチと

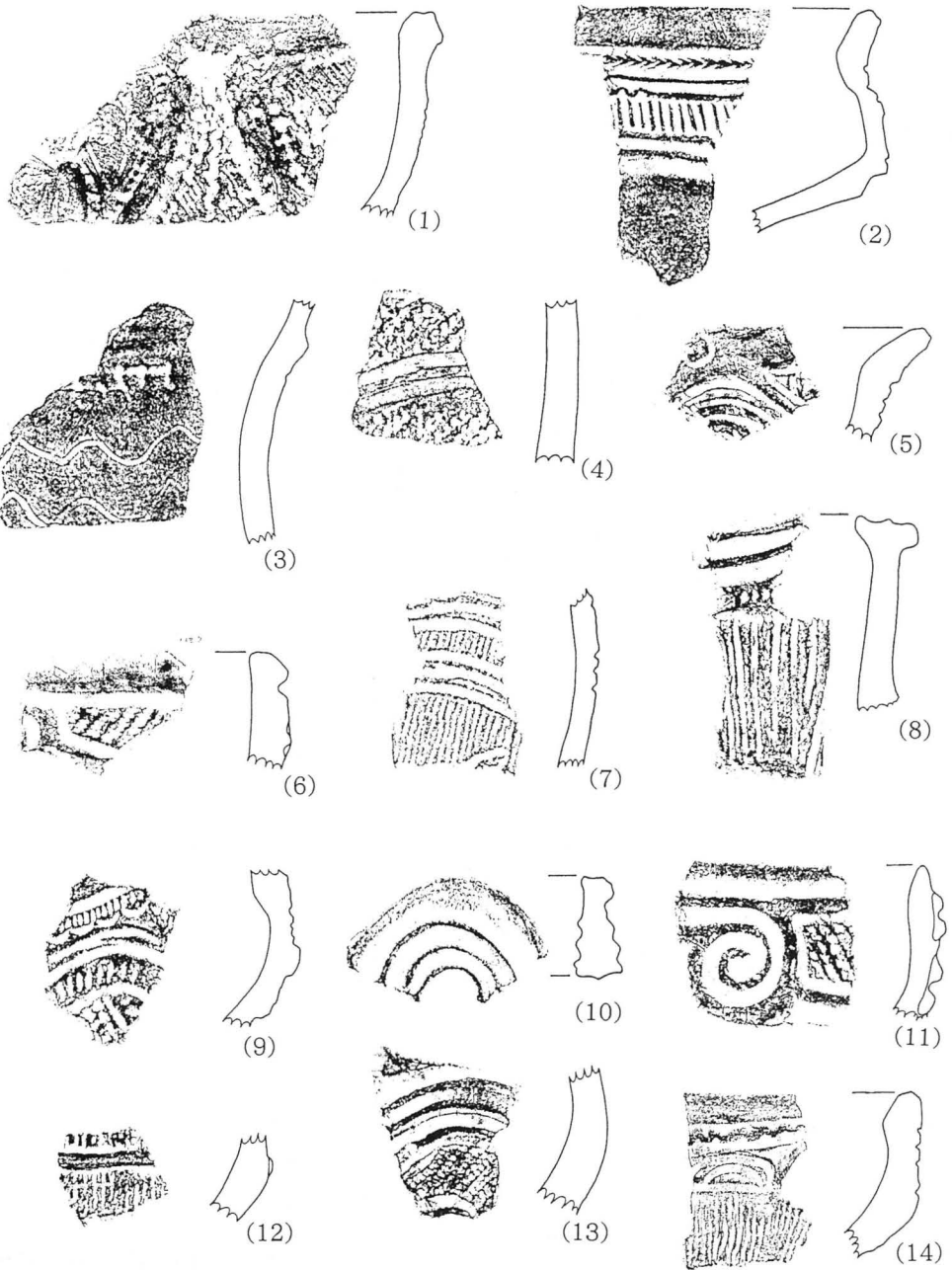
2トレンチから黒褐色土および暗褐色土の掘り込みが数か所確認された。さらに、それら掘り込み部分の覆土を掘り下げたところ、縄文時代中期（加曾利E式、阿玉台式等）の一括土器が多数出土し、土層に変化が見られることから、逐次拡張を行い、遺構確認を行った結果、住居址4軒と土壇2基が検出された。

住居址と土壇が確認された区域は、調査地の東部分に集中し、遺構は南北に並ぶように検出された。これは、調査地の西側の土地がかつて蓮田として利用されていた土地であり、地形的に低地にあたる。このことから、縄文時代の集落址の範囲は、調査地から東へと広がるのが推定される。

出土遺物は、縄文時代中期（加曾利E式、阿玉台式等）の一括土器を含む土器片約1,900片の他、縄文時代の石斧、石鏃等の石器も出土した。



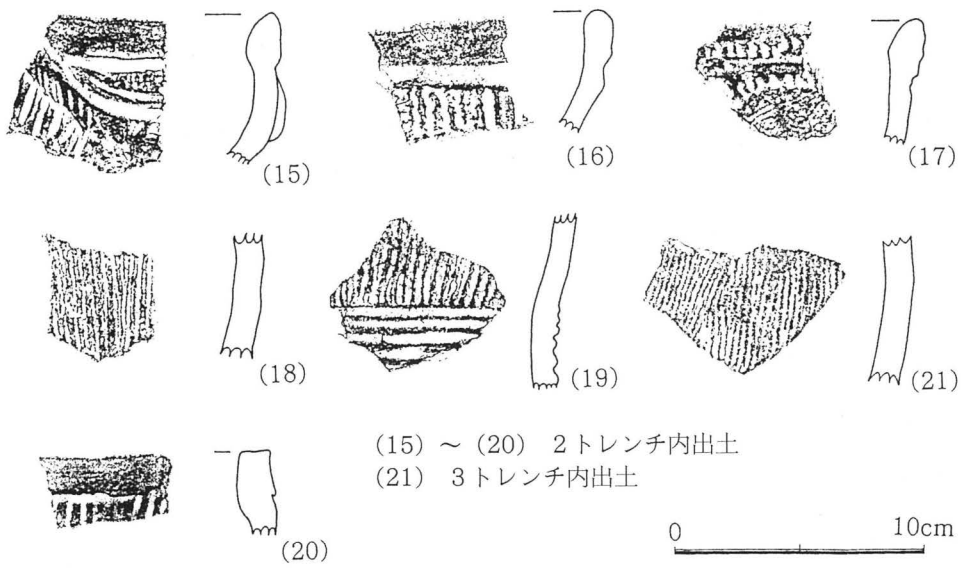
第13図 加法師遺跡調査区全体図



(1) ~ (11) 1トレンチ内出土
 (12) ~ (14) 2トレンチ内出土

0 10cm

第14図 加法師遺跡出土遺物 ①



第15図 加法師遺跡出土遺物 ②



写真23 加法師遺跡出土遺物 (No. 1~21)

第4節 ^{みなみ}南 ^{こん}近 ^{どう}藤 遺 跡 (B地点)

1. 立 地 と 環 境

南近藤遺跡は、市内南西部、東武鉄道小泉線成島駅の南西約2.5kmに位置する。『館林市の遺跡』作成に伴う市内遺跡詳細分布調査において、遺物の散布状況と付近の地形から、古墳時代から平安時代の遺跡と推定された。名称は小字名を付して命名した。

地形的には、邑楽・館林台地の南縁にあたり、近藤沼を形成する開析谷の北岸の台地西部に立地している。西側と南側には近藤沼からの低地が広がる。遺跡付近の標高は約20mで、低地との標高差は約3mである。

散布する遺物は、古墳時代から平安時代のものである。これまでに2回の発掘調査が行われており、延べ5軒の住居址が確認されている。時代別に分けると、古墳時代後期が4軒、奈良時代が1軒である。

周辺の遺跡としては、近藤沼周辺の台地上に、近藤障子遺跡（縄文、古墳 ※破壊）、伝右エ門遺跡（縄文、古墳）、北小袋遺跡（縄文）、小袋遺跡（縄文、古墳～平安）、苗木西遺跡（平安）、苗木遺跡（古墳、平安）、北近藤第一地点遺跡（縄文、古墳～平安）、同第二地点遺跡（土師）などが分布する。このうち、発掘調査により住居址が確認されたのは、伝右エ門遺跡と北近藤第一地点遺跡である。



2. 調査の概要

南近藤B地点の発掘調査は、医療法人土井クリニックの苗木町字南近藤2599-131、-132の土地における医療施設建設に伴う事前調査として実施された。

館林市教育委員会は、地権者石橋隆男氏から市農政課に提出された「青字除外申請」に基づき、同地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を開始した。開発計画は、遺跡の範囲外にある医療施設の敷地拡張であるが、これまでの調査記録との照合では、国道354号バイパス工事に伴う調査において検出した住居址（4号住居址）の未調査部分が含まれていることが確認されたため、協議を重ねた結果、耕作物の収穫後に事前調査を実施することとした。なお、同遺跡では、過去2回の調査（国道354号バイパス工事のNK地点と民間開発のA地点）が実施されているので、今回の調査地点をB地点とした。

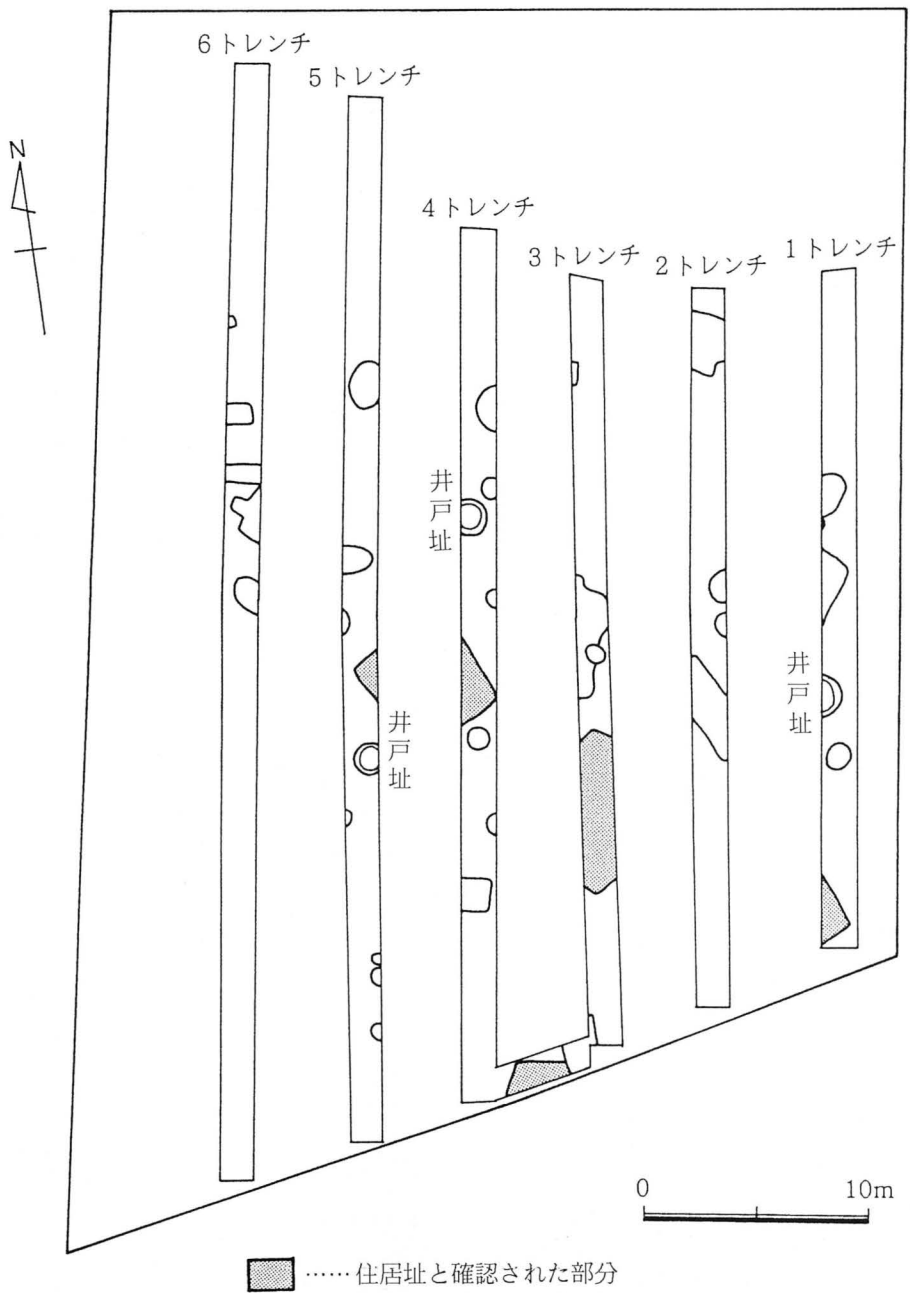
調査地は、南北に細長い形であるため、調査は南北方向にトレンチを6本設定し、東から1～6トレンチとし、土木重機により耕作土を取り除いた。この結果、トレンチ南部分では地表から約30cm、トレンチ北部分では1トレンチが地表から約120cm、6トレンチが約70cmの深さでローム面があらわれ、精査したところ、1および3～5トレンチから黒褐色土の掘り込みが数か所確認された。さらにそれら掘り込み部分を逐次拡張しながら、遺構確認を行った結果、未調査の4号住居址の他、古墳時代後期（鬼高期）の住居址3軒と井戸址3基が検出された。



写真24 南近藤遺跡（B地点）1トレンチ



写真25 南近藤遺跡（B地点）5トレンチ



第17図 南近藤遺跡（B地点）調査区全体図

第5節 しみず ばし 清水橋遺跡 (B地点)

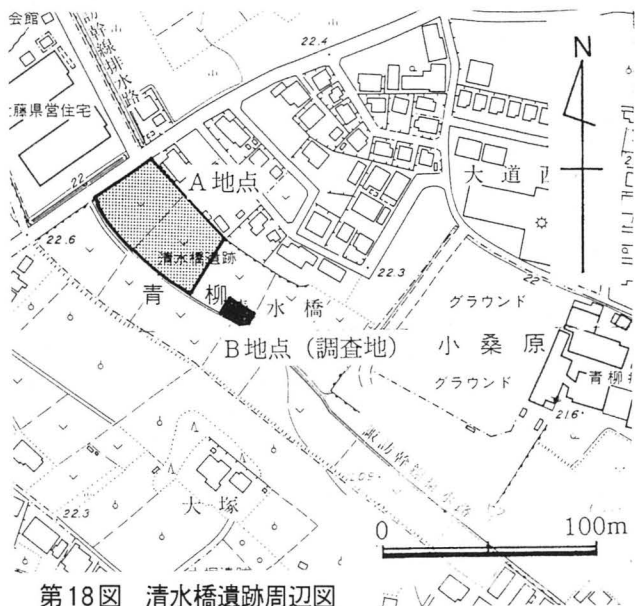
1. 立地と環境

清水橋遺跡は、市内南西部、国道354号と国道122号の交差点の南西約300mに位置する。『館林市の遺跡』作成に伴う市内遺跡詳細分布調査において、遺物の散布状況と付近の地形から、平安時代の遺跡と推定された。名称は小字名を付して命名した。

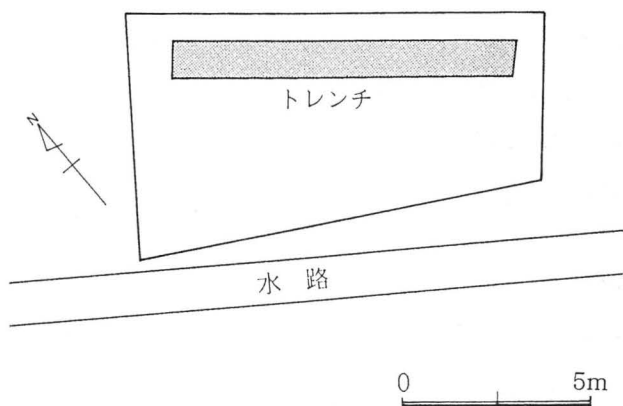
地形的には、邑楽・館林台地の南縁にあたり、旧東沼から台地を浸食する3本の谷のうち、中央部の谷（現諏訪幹線排水路）の上流部にあたる。遺跡付近の標高は約21mである。

散布する遺物は、平安時代のものである。平成3年度に発掘調査が行われているが、特筆される遺構は検出されていない。

周辺の遺跡としては、同じ台地上に、中島遺跡（平安）、大塚遺跡（平安）、中堤遺跡（平安）などが分布する。



第18図 清水橋遺跡周辺図



第19図 清水橋遺跡 (B地点) 調査区全体図

2. 調査の概要

清水橋B地点の発掘調査は、医療法人康世会の諏訪町字清水橋1513-2の土地における医療施設建設に伴う事前調査として実施された。

開発予定地中、遺跡にかかるのは、西側の市道からの進入路部分であるが、切土が及ぶこととこれまでに調査した地点よりも遺物散布の密度が濃いことを踏まえ、協議の結果、事前調査を実施することとした。なお、同遺跡では平成3年度に調査が実施されているので、今回の調査地点を



写真 26 清水橋遺跡（B地点）調査風景

B地点とした。

調査は東西方向にトレンチを1本設定し、耕作土を取り除いたが、約1mの掘り下げを行ってもローム面に達せず、調査地は地形的に低地にあたることが確認され、特筆すべき遺構も検出されなかった。遺物は土師器片が約30片出土したが、いずれも北側の台地から流れ込んだものと判断した。

■参考文献

- | | |
|----------|-------------------------------|
| 館林市教育委員会 | 『館林市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集～第29集 |
| 館林市教育委員会 | 『茂林寺沼および低地湿原調査報告書』第2集（1986） |
| 館林市教育委員会 | 『館林古環境復元図 館林城郭・城下町解説書』（1996） |
| 館 林 市 | 『館林市誌 歴史編』（1969） |
| 館 林 市 | 『館林市誌 自然編』（1966） |
| 館林市立図書館 | 『館林双書』第1巻～第25巻 |
| 群馬県教育委員会 | 『群馬県遺跡台帳 東毛編』（1971） |
| 群馬県林務部 | 『群馬県の貴重な自然 地形・地質編』（1990） |
| 群 馬 県 | 『群馬県史 資料編2 原始古代2 弥生・土師』（1986） |
| (株)小川屋 | 『八方遺跡発掘調査報告書』（1983） |
| そ の 他 | |

抄 録

ふりがな	たてばやししないいせきはくつちょうさほうこくしょ								
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書								
副書名	_____								
巻次	_____								
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ番号	第 3 0 集								
編集者名	岡屋紀子 黒澤文隆								
編集機関	館林市教育委員会								
所在地	〒374 群馬県館林市城町1-1								
発行年月日	西暦 1997年 3月31日								
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
大道北 C 地点	箇野町学大道北	1207	13	-	-	1996 1996	180	個人専用住宅	
洲ノ上 1	羽附旭町学洲ノ上	1207	132	-	-	1996 1996	23	道路	
加法師	加法師町	1207	39	-	-	1997 1997	217	墓地	
清水橋 B 地点	諏訪町学清水橋	1207	58	-	-	1997 1997	9	医療施設	
南近藤 B 地点	苗木町学南近藤	1207	91	-	-	1997 1997	354	医療施設	
遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
大道北 C 地点	集落址	古墳	住居址 1 軒	古墳時代後期土師器		確認調査 本調査			
洲ノ上 1	-	平安~近世	-	-		確認調査			
加法師	集落址	縄文	住居址 4 軒	縄文時代中期土器		確認調査			
清水橋 B 地点	-	平安	-	-		確認調査			
南近藤 B 地点	集落址	古墳~平安	住居址 3 軒	古墳時代後期土師器		確認調査			

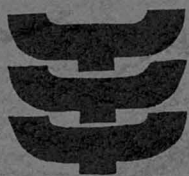
館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第30集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発行 館林市教育委員会

印刷所 オーラ印刷有限公司

発行年月日 平成9年3月31日



文化財愛護シンボルマーク
故郷の文化と歴史をみなおそう